

---

# カンピオーネ～幼女魔王の冒険～

メア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カンピオーネ～幼女魔王の冒険～

### 【Zコード】

Z3100S

### 【作者名】

メア

### 【あらすじ】

この話しさはカンピオーネの一次創作です。  
ご都合主義が多分に入ります。  
なぜなら、神は普通倒せないから！  
そして、これは八人目の神殺し…………幼女魔王の話しだある。

少女は田の前の光景が信じられなかつた。

生まれてから6年間育つた街は瓦礫の山となつていた。

見渡すとたくさんのお親が目に入つた。

自分を守り死んだ両親が目の前にいた。

「いやあああああああ…………」

絶叫をあげ現実を否定しようとするがかなわず、しだいに落ち着きを取り戻した。

そして、田の前で戦い合つてゐるまつらわぬ神一柱に復讐を決意するのだった。

再開+ナイトウイザードを追加します。

## プロローグ（前書き）

ネギまがメインなので更新はゆっくりです。

## プロローグ

少女は目の前の光景が信じられなかつた。

生まれてから6年間育つた街は瓦礫の山となつていた。

見渡すとたくさんの死体が目に入つた。

そして、自分の横に横たわっていたのは両親の死体だつた。

「いやああああああああああ！」

そして、少女は元凶に復讐をちかつた。

そう、目の前で殺し合いをしているまつりわぬ神の一人に。

少女は立ち上がり周りを見渡した。

「あれを使えばいいんだ。」

少女が手にしたのは神が使っていた神の槍だった。

槍は少女の生まれもつた強大な呪力を吸い上げ重量が格段に下がり威力が上がつてゆく。

そして、少女はお互い必殺の一撃を近距離で撃ち合い拮抗しているまつろわぬ神の背後から自信の生命力を吸わせた槍で一人の神を撃ち貫いた。

「『なんて』ことをしてくれた！」

「死ね。みんなのかたきです・・・・・・・・・・・・」

そして、極限まで拮抗していた力は外部からの刺激により暴発した。

お互い傷つき満身創痍だった二柱の神に成す統べもなく、少女とともに消滅した。

ドイツにある一つの街が地図から消えた。

後に残つたのは大きなクレーターだった。

## 幼女魔王リーゼロッテ・モルティオの誕生

「おのれ、小娘め我とフレイヤの戦いを邪魔をするとは…」

「我等が動けぬうちに背後からの見事な一撃でした。あのタイミングで神槍でなければやられませんでした。」

朦朧とした意識の中で聞き取れる会話があった。

激痛が五体を苛み、頭と全身がとてもなく痛い。

「ふん、貴様がグングールなど借りて来るからだ。」

「貴方に勝つためです仕方ないでしょ?」

あれだけダメージ受けたのにまだ死んでないなんて変。

「小娘も蘇るんだ、その時かりを返してやる。」

「ヒピメティウスとパンドラめの忌まわしき姉妹が残した呪法ですね。愚者と魔女落し子を生む暗黒の聖誕祭、神を贊として初めて成功するさんだつ（でなかつた）の秘技ですね。我等の神力が彼女の心身に流れこんでいます。」

「我の時の神としての力もか。」

「ええ、こんなケース初めてだけど一人同時に倒してくるからね。」

「もう、新たな落し子の誕生に気付いたか。」

「パンドラが直々に来ましたか。」

「あら、「」挨拶ね。あたしは神と人のいるところには、必ず顕現する者。あらゆる災厄とひとつかみの希望を「」える魔女ですもの。驚くほどのことじやないでしよう?…………この子があたしの新しい娘ね。ふふ、苦しい?でも我慢しなさい、その痛みはあなたを最強の高みへと導く代償よ。甘んじて受けろといいわ!」

甘く可憐な声が耳朶を打ち、やさしく頭を撫でられた。

「誰だろ？」「この声の人は？お母さんだろ？」「

「さあ皆様、祝福と憎悪をこの子に『えて頂戴！八人目の神殺し  
護堂よりもさらに若き魔王となる運命を得た子に、聖なる言靈  
を捧げてちょうだい！」

「ぬかせ、貴様の新たな落し子などすぐ葬つてくれるー！」

「では、私フレイヤが祝福を『えます。貴女は私達の  
愛の女神と時の神の権能をさんだつする最初の神殺しです。何人  
よりも強く賢くなりなさい。再び我々と戦う日まで、負けぬ身であ  
りなさい！」

「史上初めて一人の神を殺したあたしの落し子よ。楽しみにしてい  
るわ。」

「つして、八人目のカンピオーネは生まれたのだった。



## 幼女魔王リーゼロッテ・モルティオの誕生（後書き）

ふう、神様へんかもしれないけど気にしないでね。  
ちなみに、パンドラ達は不意打ちでも人間の状態で神を殺したなら  
認めてくれると思います。  
それに、一人同時ですかね。

## カンピオーネ（前書き）

名前を変更しました。そして、原作お読みの方は、今回読む必要がありません。なぜなら、カンピオーネ第一巻田にあるカンピオーネの説明だからです。

## カンピオーネ

【一九世紀イタリアの魔術師、アルベルト・リガノの書籍『魔王』より抜粋】

……この恐るべき偉業を成し遂げた彼らに、私は『カンピオーネ』の称号を与えたい。

読者諸賢の中には、この呼称を大仰なものだと眉をひそめる方がいるかもしれない。あるいは、私の記録を誇張したものとみなす方もいるかもしれない。

だが、重ねて強調させていただく。

カンピオーネは霸者である。

天上の神々を殺戮し、神を神たらはしめる至高の力を奪い取るが故に。

カンピオーネは王者である。

神よりさんだつした権能を振りかざし、地上の何人からも支配され得ないが故に。

カンピオーネは魔王である。

地上に生きる全ての人類が、彼らに抗つほどの力を所持できないが故に！

【一〇世紀初頭、枢機卿アントニオ・テベスが教皇庁に宛てた書簡  
より抜粋】

神に背を向け、悪魔の知識を弄ぶ魔術師どもに『王』と崇められる存在がござります。

おそらく、皆様も彼奴らの称号を一度は耳にしたことがありでしょう。

カンピオーネ。ヒペメティウスの落し子。魔王。

極めて遺憾ながら、この者達に抗う術を我ら人類は持ちません。

彼奴らと互角に戦い得るのは、同等のカンピオーネか父なる神に使える天使たち、または忌まわしき異教の神々だけなのです……。

## カンピオーネ（後書き）

変わりなく外見は星空○メモリアに出て来る可愛い死神メアちゃんです。

## 記憶と言葉を無へして（前書き）

どんな魔術があるかわからなーいし、適当に自由にやるやつー。

記憶と言葉を無くして

ん…………私が目を開けると見知らぬ天井が目に入った。

「…………（リリリはぢえー）」

声がない…………それに私っ！

思いだせないとすると激痛が走った。

なつ、名前は…………リーゼロッテ…………名前は…………  
つ…………思いだせない。

年齢は…………六歳…………ぐつ…………だめ  
わからぬ…………思いだせない…………うう

やひじたひ らひく いいの だれかたす  
けで。

ドアが開き、おばあさんが入ってきた。

「おや、気付いんだねよかつたよ。水をお飲み……」

おばあさんが水の入ったコップを差し出してくれた。

「…………（ル）」

「けふおつ、けふおつー。」

喉が乾いていたので、水を活きよこよべ飲んだため蒸せた。

「ほり、大丈夫かい？ ゆっくりお飲み。」

「…………（ル）」

「…………（あつがとう）」

「無理で騒ぐなよ。まじ、お休み。お粥作っておつからね。

「

お粥つてなやんだろ…………ねみゅい…………。

「ああ、お休み。」

「…………（うへ）」

そして、私は眠った。

嫌…………嫌…………見たくない。

「逃げるんだー。」

「アーティストのアート」

少女を連れて逃げる二人。

見た」とある顔……………でも、思い出せない……………思ひたそうとすると激しい頭痛がするだけで……………ちつとも思いだせない。

そして、一人が少女をかばい槍の一撃をくらい死んだ。

それから、少女は辺りを見回し絶叫した。

私と少女が悲鳴を上げた。

そして、目覚めた。

「大丈夫かい？」

隣でおばあさんが心配でつい声をかけてきた。

「……………」

慌てて頷く。声は全然でない。

「そうかね、これを飲んでお休み。」

魔法瓶から温かそうな飲み物を貰いゆっくり飲んでゆく。

蜂蜜とミルクが混ざり合っても美味しい。

「それじゃ、私は隣の部屋でいるから、なにかあつたらい呼び。」

おばあちゃんは立ち上がり、部屋から出ようつゝある  
……………ひとっせ……………いや……………いや

「どうしたんだい？」

無意識におまおさこの服の裾を掴んでいた。

「…………あ…………う…………」

「一緒にいてほしいのかい？」

「…………（）へ（）へ」

「分かったよ。なり、一緒に寝ようつかね。」

「…………（）へ（）」

おばあちゃんに抱きしめられながらゆっくりと寝る事ができた。

次朝、身体は動くようになった。

おばあちゃんに言われてお粥を食べた。初めて食べたけど、美味しい。身体の芯から温まって来る。

食後、おばあちゃんと会話をしている。

「まだ、話せないのかい？」

「…………（少しぐれ）」

相変わらず、言葉でない。

「やうかい。じゃあ、ちょっと待つヒコド。」

おばあさんは奥の部屋にいった。

「？」

なにを持つてきてくれるんだろう。

ゆっくり蜂蜜ミルクを飲み待つていると、長細い箱とスケッチブックみたいなのが持ってきてきた。

「字は分かるかい？」

「…………う…………し…（少しぐれ）」

「分かるみたいだね。」

おばあさんから、スケッチブックと長細い箱を受けとった。

「君ちはスケッチブックで、これはクレヨンだよ。孫の持ち物だ  
けど、ここつらむだれかに使つてもうが幸せだらうから、遠  
慮せずに使つておくれ。」

「…………（君へ）」

受けとったスケッチブックにさく文字を書いてみる。

「“ありがとう”」

「氣に入つて貰えてよかつたよ。」

拙い字だつたけど、伝わつてよかつた。

「私は、ツアオバラード。ツアオでもおばあちゃんでも好きお呼び。

」

「“ツアオバラーナー…………魔法使い…………？”

「ああ、名前は捨てたからね。今は、ここで一人暮らし。じばりくじに歸るといいよ。」

「“ありがとう。おばあちゃん。”

それから、数週間たつた。

私は、相変わらず喋れない。

おばあちゃんの家にある本を読み本の内容を覚えていった。

「ここまで覚えたのかい。」

おばあちゃんが飽きていた。なんでだろ？

「よく、理解できるね。基礎しか教えてないの。」

おばあちゃんに魔術の基礎を教えて貰うと、魔術書の内容がすらすらと理解でき、同時に使える確信が芽生えた。

「“かんたん…………わかる。”」

「世の魔術師が聞いたら泣くレベルね。」

「“もつと…………読んでいい?”」

「ああ、家にあるのは好きに使いな。後は、夜一人で寝るとお風呂も入れるようになるいいんだけどね。リゼット?」

「“無理”」

内容は覚えてないけど必ずといつていよいよ夢を照らし、お風呂は…………目が痛いし。

一年がたつた。

「またたく出鱈田じやな。一年で魔術を極めてしまつか。」

「“家にある本は全部覚えた。”」

家にあつたのは、ローン、セイズ呪術、魔術。

「“次は鍊金術を研究する”」

「“そりが、頑張りな。”」

「“うん。”」

それから、三年……………10歳の誕生日に運命は動いた。

## 記憶と言葉を無くして（後書き）

次は戦いです。

そして、どんどん強くなるリーゼロシト。

愛称は「リードガード」です。

クロノス（西方）とフレイヤの権能募集！

倒して欲しい神に壊して欲しい街や歴史的建造物も募集しますよー！

じゃんじゃんビリード！

## リーゼロッテの覚醒（前書き）

イレブン・アイズが混ざってる。

そして、リア友に戦う神なにがいいか聞いたらどんでもないのが来たので、頑張って書いてます。

明日……………今日、続き頑張る。めっちゃ途中でメール容量超えました。

## コーゼロシテの覺醒

【コーゼロシテは神殺しである】

おばあちゃんが暮りして四年の月日が経りました。

私は、鍊金術の頂きに達いた。

そう、完全物質である呪法增幅機賢者の石がと偶然の産物で虚無の石ができた。

おばあちゃんが取っていたオリハルコンと変な石を混ぜたりできたの。

「しかし、賢者の石まで作りだすなんてね。貴女の田は凄いから気をつけのよ?」

ГЛАВА

私の右田には「叡智の魔眼」が魔術を習いだすと現れた。

叡智の魔眼は、あらゆる魔術、魔法や物質を解析し理解できる。

魔眼のおかげで、こんなに早く覚えられた。使いすぎると一定期間失明することを身を持って体験した。

「後、私に何かあつたらこの手紙を持つて、日本にいる草薙一郎つて男に届けておくれ」

「分かつた」

おばあちゃんの体調はどんどん悪くなつていく。

寿命……………また一人になるの？エリクシールを作ろうとしたけど……………止められた。それに、意味がないらしい……………

.....うつ。

「そんな顔するんじゃないよ。この頃、私はたのしいんだから。死んだ孫とは別に新しい孫ができたんだからね。」

ぐす.....頭を撫でてもらいつと安心する。

「私の技術も継承してくれたからね。」

「“闇の魔法？”」

「そうだよ。まさか、私が投げ出した魔法まで完成させるとはね。この希代の魔術師といわれた私だといつのにね。」

アレイスター やエリファース つて名乗つてたらしく。

「“田があるから、楽だった”」

「さうか、リゼットに伝えなくてはならないことが.....  
.....ねや、お密のようだ.....リゼット今すぐ裏手から買い物へ行ってくれないかい？」

おばあちゃんの身体が若返っていく。それと同時に私の身体が軽くなつた。

「…………」

得に気にせずに裏口から街に向かつた。

アレイスター Side

いつたか、済まないリゼット。

さて、これで見逃してくれるといいのだがね。

私の肉体は二十代後半に戻っている。

外に出てお客様と対峙する。

目の前には、つば広い帽子を田深にかぶり、青いマントの老人がいた。

「『用件をお伺いしたいまつろわぬ神よ。』

「決まっておるわ。わしの愛人を殺したコピメテウスの落し子を始末するためよ。」

やはり狙いはリゼットか。

愛人…………そして、この格好…………

「神よ無礼を承知でお願い申しあげます。お見逃していただきたくお願い申しあげます。」

「断る。」

神槍かまざいな。

「では、御手向かいいたします。」

「神に挑むとは愚か者めが、身の程をわきまえよ！」

さすがですね。勝てる気がしません。しかし、時間は稼がせていた  
だく。

「契約のもと、アレイスター・クロウリーが願い奉る。顯現せよ魔  
術と冥府の神へカティーよ！」

空中に黒い神力の塊が出現する。

「ほひ。」

「固定、掌握ー！ぐつー！」

冥府神の力を身体に取り入れ、神降ろしを行う。

「冥府神の力か、借り物の力でわしをどうにかできると思っているのか！」

「思っていません。ただ、譲れない物があるだけです。」

人生最後の戦いを大切な者のために開始した。

「来たれ冥府の雷！」

黒い雷を放ちながら、戦場を動き回る。

「無駄だ。」

やはり、雷では無理か。

「くつー！」

向こうにも雷撃を放ってきたが威力が段違いだ。拳銃と弾道ミサイルくらい違うな。大地に手をつけ神力を流しどうにか避ける。

「避けたか。では、こいつはどうだ？」

奴の影から狼が一匹現れた。

「くそ。」

襲い来る狼をよけ、大地に神力を流し込む。

「我が矢は矢にあらず、死の力を宿すものなり！」

弓を作り、矢を放つ。

「ー。」

狼を貫き、大地に縫い付ける。

「かつ、殺す」ともできるのか…」

奴の炎の魔術を避けたところ右腕に噛み付かれた。

「ふん、ただではくれてやらんー舞え、炎獄！」

右腕もろとも狼を燃やし呑く。

片腕を抑え出血を抑える。都合がいい。

「やるではないか！」

神槍を構え突っ込んでくる。

「させるかー風よ我が意に従い顯現せよ！サイクロン！、風よ我が身をつつめー！」

嵐を呼び奴の妨害を行う。そりで風を纏い距離を稼ぐ。

これで……………つ！

「がつ……」

サイクロンを突き破り、一本の槍が飛来し左足を貫いた。

「ぐわー。」

左足がちぎれたか！

「じりやい、じりまでじゃな。死して我が配下に入るがよい。」

「じりまでなのか？」

「そして、貴様の手で憎き神殺しを殺してくれるわー。」

ふざけるなー誰がそんなことさせるものか！大切な者をまたこの手にかけるなど許せるか！

「ほら、まだ抗うか！」

「ぐはーー。」

蹴られ、家の壁に激突し、壁が崩れた。

「ううまでか！」

「おばあちゃん！――」

リゼットの声が聞こえる

。 。 。

おばあちゃんに言われた通り、裏口から山を下る。

お客様って誰だろ？ 嫌な感じがするナビ。

つ！

なに今の音…………。家のほうから轟音が聞こえてきた。

なにかあったの？

狼の遠吠え………… 庵らなきやー！

家に入つたら、壁が崩れて若て姿のおばあちゃんが飛ばされてしまった。

「おばあちゃん……」

「…………逃げぬ…………奴は…………お前を…………」

「嫌ー！」

なんだ、おばあちゃんがー！

「…………だ…………し…………（だめ、死なないでー）」

どうやら血がながれちゃへ。

「…………なひ…………ひりく…………うう…………（  
なんで…………ひとつ…………しないで…………）」

「なく…………な…………それ…………よつ…………伝ぐる…  
…！」とが…………ある…………」

「“なに？”」

スケッチブックの既に書いてあるページをひらく。

「…………リゼ、ツト…………お前…………は…………カンピ  
……オーネ、だ…………お前が…………殺し…………た神の復  
讐…………だから逃げ…………る…………いや…………る…………」  
…………

それだけ、いつておばあちゃんは田を閉じた。

やだ…………私のせい？

私が神を殺したから…………。

ふらふらと外に出ると、つば広の帽子を田深に被つり青いマントを身につけ、灰色の髪を蓄えた片田の老人がいた。襲い来るプレッシヤーは半端ない。

「お初にお田にかかる。若きゴペメテウスの落し子よ。我が名はオーディン。貴殿に殺された愛人フレイヤの敵を取りに来た。」

なにを言つていの？私が殺したなんて…………。

「“ そんなの、私知らない！” 」

そんなにアヒドがおもてやんを殺したのー

「ふむ、記憶がないのかね？」

「」

「ふむ、なら戻してやるかの！」

つ！日の前に行きなり現れ首を絞められる。

「あつ」

苦しい…………息ができない…………ない

「んっ！」

指を口の中に入れられながらの魔術をかけられる。

「わあ、思ひだすのじやー！」

その言葉と同時に頭の中に今までの悪夢の内容やこわいなことが流れ込んでくる。

「ふはは、おもいだしたか！」

オーディンは私を放り投げた。

「貴様のせいで我が計画が狂つた。ゆえに貴様をフレイヤ復活のための贊してくれる。」

「はあ、はあ。があつ！」

蹴られ殴られ続ける。

お母

さんもお父さんも、おばあちゃんも友達もみな死んだ。

生きてる意味あるのかな？

「ふん、あの愚か者も愚かな無駄死にだつたな。」

「ぐ……かはあー。」

踏み付けられ、蹴られる。

「」のよつな者のため」、命を落とすとはなー。」

おはあけやさ……。

「うつー。」

槍で刺され死を意識する。

本当にこいつの「」のまま死んでも

貴女は誰？

私は貴女、6年間生きた私  
私はあいつ  
から全てを奪つた神を許すことはでき  
ない  
貴女はどう？おばあちゃんを奪つたあいつを許せる  
？

許せない。

おばあちゃんが最後に願つたことは？

生きりつて.....。

なら、行きましょう。私達の前に立ち塞がる者をこと  
じとく排除しましょう

うん、私達から大切な者を奪つた奴らに復讐する。そして、おばあ  
ちゃんが願つた通り生きる！

ええ！

私達はここから生まれる

さあ、行きましょう。私達は霸道の道を進むのみ————！

私の前に、自分と同じ姿……………今の私よりほんのすこし小さい姿の少女が現れ手をさすだしてくる。

私はその手を躊躇なく握り返す。

「なんじゃ、いきなり神力が上がつたじゃとっ。」

二人のリーゼロッテが混ざり合つ。

「「私は冥府魔道を進む者なり！」」

初めて自分の声を発する。

「「我が霸道の前に立ち塞がる者をことごとく打ち碎く者なり！」」

」

宣誓を行つていくと身体の奥から力が沸いて来る。

「「人であるうと、神であるうと、魔王であるうがあれば、生きとし生けるものに死を」とえん……。」

一人のリーゼロッテが完全に混ざり合った。

「なんじゃこの馬鹿見たいな神力と呪力は！」

完全に混ざり合つと同時に爆発的に神力が増大した。

「成った。」

頭の中がすつきつしている。

「覚醒したか。遊び過ぎたか。しかし、これもよい…せい、戦うぞ  
コピメテウスの落し子よ…！！！」

「私は破壊し殺し殺戮するだけ。」

「やれる物なら、やつてみるんじゃなー。」

「言われるまでも無い。」

そして、手を付きだし攻撃を行つ。

「契約に従い、我に従え、四元の女王、我が前に立ち塞がる者に死を与えよ、虚無の滅び。」

四元素を全て合成し、目標地点で対消滅を起こさせる。

「これは、まざいの！スレイプニルよ！」

はずした。

オーディンはスレイプニルに乗りグングニルを構え高速で突っ込んできた。

「我が槍は避けられぬぞ！」

グングニルがやっかい。地面に手をつけ土の壁を多数鍊成し、防壁にする。

「無駄じゃ！」

「…」

多重障壁を展開。同時に、氷の槍を多数打ち出す。

「無駄無駄！」

「ぐつ、痛い。」

クングニルによつて吹き飛ばされた。

その後も応戦するが、クングニルの絶対命中は強力だ。

「どうした口だけか！」

暴風となり襲つてくる。

「ブラストフレア！」

オーディンの隙をつき吹き飛ばすが黄金の鎧に阻まれダメージが無い。

すかさずオーディンはクングニルを投擲してくる。勝利の笑みを浮

かべている。

死の恐怖と憎悪が増大する。そして、一つの権能が使用可能になつた。

「停滯空間。」

使用したのはクロノスの権能「時の支配者」。時間をとめ、覗知の魔眼を過剰に使用し止まつて いるグングニルを分析する。

グングニルを手に取り全力で神槍を支配し、大量の賢者の石と虚無の石を使い分解、再構築を行う。こうして、クングニルは鎌に生まれ変わり私の物となつた。

## リーゼロッテの覚醒（後書き）

やつひました。リゼットが冥府魔道に…………まいつか。私が好きな言葉は善悪相殺。

感想あるがといひました。

なぜなに幼女魔王様は～じま～るよ～（お～

今回は、リーゼロッテの機能について～です。

実は時の支配者以外にも使われてます。そう、叡智の魔眼です。  
時の支配者は、その名の通り時間を操れます。  
その中でも三つの区別がある。

一つ目は今回使われた停滞空間。これは一時的に時を止めることが  
できる。制限時間は一日で約10分から30分の間止められる。  
止めてる間に生物攻撃しても意味はない。

この空間、内で動ける生命は本人のみ。  
物とかなら触れて許可をだしたら元にもどる。今回はグングールを  
元にもどし、神力を思いつ切り使って支配を奪いとりました。

ここからは、代償を説明するね。

停滞空間の代償は止めた時間の10倍肉体の成長が止まる。

名前は考えてないけど、未来に進ませる方は歳をとる。過去は身体  
の年齢が下がるです。レートは過去未来はもうひとつ厳しくしようと

かなとも考え中です。

覚醒条件、使用条件は恐怖と憎悪です。クロノスは怖くて息子たちを食べたから。憎悪は親を殺したから（？）、もしくは子供を憎んでたんじゃないかな？一時は。

次はフレイヤより叡智の魔眼。

これも權能だよ。リーゼロッテは理解してなくとも使ってたけど。

智の女神と呪術の女神としてだね。

才能はあつたし、女神の權能でも上がった。そして、駄目押しが魔眼ですね。解析、細かく調べられる。

覚醒条件は魔術などを畳う。

代償、使用制限。

長時間の連続使用や解析難易度で変わるが基本的に、目から血がでるまではまだまし、痛いだけ。

負荷が超えると一定期間右目が失明し不規則に痛みが襲う。最初は約三ヶ月失明した。草薙の復活と同じくどんどん下がっていく予定です。

ドイツで魔術結社だすならゲーテ？

まあ、リーゼロッテ的に日本こむかって歩くだけ！

では、このへんで。また会いましょう。

なぜなに幼女魔王様終了。

## 主神オー・ディンとの死闘

そして、できた鎌は全身が紅く、刃身の真ん中に漆黒で色々なルーンが刻み込まれている。

「なんだ、なにがどうなったのじゃー。」

「クングールを掌握して作り替えた…………」

驚いているオー・ディン。

「いく……………プラストフレアー！」

隙を逃さず魔術……………魔法の域に届いた術を行使する。先程とは威力が違う。この鎌自体が賢者の石でできているし、ルーンも刻まれているのだから、增幅効果は圧倒的。

「ぐはあー。」

今度はダメージが入った。追撃をかける。

「神々のいましめを解き放たれし、深淵よりも黒き虚無の刃よ、我が力、我が身となりて、共に滅びを『えよ、神々の魂すらも打ち碎かん!』

言靈を使い鎌ディザスター殲滅者の虚無の力を解放する。

「アクセセルブースト加速増幅。」

即席で身体加速魔法を創り、吹き飛ばされたオーディンと相馬スレイプニルに接近した。

「死んで……。」

スレイプニルの頭を刈り取り、遠心力を利用した切り返しでオーディンの首を狙う。

「つーユル!」

防御のルーンか。

「エオーラ...」

不可視の障壁を切り裂き消滅させた時には、既にオーデインはエオーラを使いランダムに移動したみたい。見渡すと離れた位置にいた。

「仕留め損ねた。」

「おのれ！来たれ、戦乙女！」  
ヴァルキリア

背中に羽根のある美しい女性が数人現れた。

「ありがとつ…………わざわざ教えてくれて。」

「なんじゅとー。」

「私は…………フレイヤの権能を持つ。そして、フレイヤも戦乙女を統轄している。つまり…………来たれ、戦乙女！」  
ヴァルキリア

「ひりも戦乙女の権能を使い召喚する。」

「へつー。」

「「「行け！――」」

同時に指示を出した。戦乙女同士の激闘が始まった。

お互い、指揮しつつ魔術を撃ち合つ。

「ティール！」

戦いのルーン…………なら…………。

「多重発動、術式拡大・狂戦士、再生の炎！」

狂戦士により身体能力が格段に上昇し、傷を恐れなくなる。ほぼテ  
ィールと変わらない。再生の炎は傷を持続的に治してゆく。

「ゾーン！」

オーディンがさらにルーンを使い氷の巨人を召喚された。

急ぎ近づき、殲滅者で切るための準備をする。

「刀身を再構築…………巨刀。」

巨大な刀身に再構築し直し巨人を一刀両断する。

「つ！」

巨人を殺したところに炎槍と氷槍がとんできた。

「ディヴィアイン・バスター！」

魔砲で炎槍と氷槍を破壊し、閃光で視界が白く染まるなか、停滞空間を使い、オーディンに接近し解除と同時に切り付ける。

「対策はしてある！」

鴉が割り込んできた。

「残念。」

「次は一ひらからじやー。」

その後、何度も切り結んだ。

だんだん、押されてきた。悔しいけど、さすが北欧神話の最高神つていうところ地力が違う。

なにかないかな?打開策を見つけなきゃ負ける。止めの一撃はあるけど当たらない。

まったく、逃げろと言つたのにな。

覚醒すればもはや、平穏な生活とは無縁なのにな。

「しか、し……さすが……」

孫娘のために最後の一手をくれてやるか。

激痛を堪え、這つて進む。

「こも……だ……」

リゼットとオーディンが離れた。

「まつ……どう……オー……デイ……わわ……  
め……の……わけだ……」

貴様が敗北する理由は私とリゼットをあなどつたことだ。

さあ、冥府の鎖タルタロスよ。我が命も吸い付くし奴を戒めよ……！

後は、まかせたぞ…………… 我が愛しき子よ。

クロウリー Side Out

これは、おばあちゃん?

私は、おばあちゃんの呪を感じた。

「なんだこれは…」

大地に六芒星の魔法陣が現れ、中から漆黒の鎖が出現し、オーディンを搦め捕る。

「いまがちゃんと……」

「ぐ、外れぬ！あの人間の仕業か！」

「おばあちゃんがくれたんだ。ここに仕留める…………我は神を殺し、神の力を篡奪するものなり！」

身体は既に限界を超えているが執念で動かす。

「ぐ、碎けよ！」

タルタロスの鎖がどんどん壊されていくけど…………私の刃はオーディンに届いた。

「まだじゃー！」

「うん、これで終わりだよ。神を碎く者ー。」

オーディンに突き刺さった刃から虚無が溢れ出しオーディンの内部から破壊してゆく。

神殺しの虚無の刃の言靈と神を碎く者による内部からの解放攻撃。正真正銘、全力全開。神力、呪力共に全てを虚無の破壊に注ぎ込む即席で創りだした最強の切り札。

「覚えておれ！――！我は貴様を必ず殺してやるわ――！」

その言葉を最後に残し消滅した。

それと同時にオーディンの神力が流れ込んでくる。

「勝った…………ね、めでたしかったよ」

傷だらけの身体を引きすつおばあちゃんの元いくとそこには……  
おばあちゃんの服とおばあちゃんが大切にしていた  
神力を醸し出している黒い十字架のペンダントがあつた。

「おばあちゃん……………ありがとう……………私は生きるよ……………」

これだけは、持つてこい。ペンダントを首にかけてお墓を作り、相談してあった通り家を燃やす。悪用されそうな危険な魔術書などがたくさんあるから……………認識疎外と人払いの結界を張り

「うう……………おばあちゃん……………」

涙が止まらなくなり一晩中泣きつけた。

次の日、右目を押さえながら街へと向かった。



## 主神オーディンとの死闘（後書き）

ふう、終わった。

先生、オーディン強すぎルーンまじ反則。

### 補足説明

最後のタルタロスの鎖は、対象の力を一時的に封印できます。

あと、準備してる間にタルタロスの鎖を回収したリーゼロッテである。

送り返してないからちぎられた部分は残りそれを合成して自分の物にしたリゼット。

### 現在の装備

主兵装：殲滅者ディザスターこれは、体内に収納。

補助武装：タルタロスの鎖。これは、左手にある。伸縮自在。

アクセサリー：神器のペンダント（十字架）。なんの神かは分かっていない。

です。

では、次回。感想待つてます。

## 新たな出会い

地形が変わった山を、まだ身体中に傷が残っている状態で一生懸命下山していく。

うう、痛い…………あう、頭打つた…………ぐす。

左目だけだから、距離感がわからない…………戦闘中はカンピオーネの力で大丈夫だつたんだけど…………。

あう、こけた…………。

そして、身体中に傷を作りつつなんとか街に辿り着いた。

「？？？」

ネチュカワの町につきました…………おかしいの  
違う街にいくはずなのに…………なんでだらう？

「…………ねむいの…………」

「おい、大丈夫か？」

倒れてゆく身体を誰かが支えてくれたねが分かった。

「おい、しっかりしろー。」

誰かの声を聞きながら意識が途切れた。

北欧の最高神オーディンがまつろわぬ神としてド

【賢人議会に提出された新たな報告書より】

【一年前に賢人議会に提出された報告書より】  
ドイツで起きた消滅事件について、この事件は調査の結果まつろわぬ神フレイヤとクロノスが戦っていたことが原因だと思われる。それと同時に新たな魔王が生まれたという噂も出て来た。

イツに顯現したとの神託がくだされた。一年前に消滅したフレイヤとクロノスとの関連性も疑われる。そして、次の日にはオーディンが何者かに殺されたみたいです。結果を見つけると、地形が変わった山を見つけた。これは明らかに神と何者かが争った形跡がみつかった。しかし、神殺しや別の神もこの地に現れていないことからドイツに八人目の神殺しが現れた可能性がある。

ん、ルルルルルル。

「お、あいついたか？」

「…………あ…………（ルルルはは？）」

「…………また…………雷葉がでないよ、

「おこ、どうした？」

「…………あ…………つ……」

頑張つてジースチャーで伝える。

「面葉が出なーのか。」

「…………（）へ（）へ（）」

「わづか、ビリあるか。」

十代後半ぐらいの少年が困つてると、奥から少年と回り合ひ、十代後半ぐらいの少女がやつてきた。

「きづいたみたい?」

「ああ、それが喋れない見たいなんだ。ビリあるか?」

「なり、紙と鉛筆。」

紙と鉛筆を受けとつお礼をくる。

「“ ありがとうございます。 ”」

「俺はシンだ。」

「よひじべ。」

黒髪の男の人気がシンで金髪の少女がステラ……覚えた。

「“ リーゼロッテ。リゼットでもリーゼ好きに呼んで下さい。 ”」

「分かった。」

「うふ。」

それから、しばらくして不思議な事実に気付いた。

「“ 消失事件は四年前じゃなくて一年前？”」

「うふ、そうだよ。」

「そういえば、おばあちゃんが『』の結果は特別だったっていつたから、それのせいかな？」

「“ありがとう”」

「気にしなくていいわ。」

それから、話を聞くとビーナスアーチュカワの町で一人暮らししていられる。

「ワーゼは向處にいりつとしてた?」

「“日本に行ひつとしてた。”」

おばあちゃんから受け取った手紙を届けないといけない。

「日本…………お金が結構な額必要だがあるのか?」

「“ない”」

手元には、Euler<sup>ユーラー</sup>が少しあるだけ。

「“でも、飛んでいけばいい”」

「飛んで?」

ステラの疑問はもつともだよね。

「“魔術で飛んでいくの”」

「君も魔術使えるんだな。」

「“貴方達も使えるんだね”」

「「うん／ああ」」

「でも、無茶…………」

「“そうかな?”」

「うふ（なでなで

ふわあ、気持ちいいです。

「日本までの距離を考えると無理だな。」

残念です。ヴァルキュリア戦乙女に持つて貰つて飛ぼうとおもつたんですね。

「それと俺達は、東北聖堂騎士団には追われてこる。」

東北聖堂騎士団はたしか、性魔術結社でしたね。

「ステラが狙われてるんだ。」

「“なぜ？”

「神を召喚するための生贊にするんだと。ふぞけやがって。」

「だから、シンが連れ出してくれた。」

「“なるせじ、わかりました。”」

助けていただいた恩もありますし排除しましょう。

「危ないから、傷が治つたら出でに行つたまつがいい。」

「だな。」

「“わかつました。じぱりくねせ話になつます。”」

じぱりく、シンとストーカのおせ話にならうとした。

## 新たな出会い（後書き）

シンとステラ……………ええ、種運命ですよ。ステラが好きです。シンは殺すかどうするか悩み中（あ

## 新たな神？

ステラお姉ちゃんやシンお兄ちゃんと一緒に生活しだして一週間がたつたです。

「おい、二人共できたぞ」

「　「　はい　（うん）」　」

ステラお姉ちゃんは声を出して、私はスケッチブックで返事をするのです。

「はい、持つて行つて」

「　・　・　ん　・　・　」

一人で、シンお兄ちゃんが作った卵とクリームチーズソースを絡ませたパスタを一人でテーブルに運ぶのです。

「　“　美味しそうなのです　”　」

「うん」

湯気を出している美味しそうなパスタ。具材は厚切り生ベーコンに

マッシュルーム、玉葱・・・・あらびきパショウもいーアクセントになっているです。

「・・・・・美味しい・・・・・」

「“はい、とても美味しいです。いつもありがとうございます。”

皆さんお分かりかも知れませんが、リーゼとステラお姉ちゃんはいつさいの生活能力が無いのです。はい、シンお兄ちゃんにたよりつきります。あと、リーゼは一応料理は出来るのです。材料を鍋に入れて呪力を込めながらネルネルするだけなお仕事なのです。

「どういたしまして。それより、リーゼはどうするんだ?怪我はもういいんだろ?」

「“はいです。」の一週間の間に完治したのです。」

右田はまだ使えませんけど、身体や呪力は回復したのです。

「そうか。なら、もう行くのか?」

「“はいです”」

「心配

「“大丈夫なのです”」

前から予定していた事です。

「“それに、早く手紙を届けないといけないのです”」

「そつか・・・・・」

晩ご飯を食べた後、部屋に金塊を10個くらい作り出してから、深夜にこつそりと抜け出したのです。

そして、移動したのはこの街の出入口である橋なのです。リーゼは鎌を持って、この橋で仁王立ちなのです。

「止まれ！」

しばらくすると、白い鎧の一団がやって来たのです。

「小娘、何用だ。我等の邪魔だてをするなら許さんぞ」

「“それは、」ちひりのセリフなのです。一人の邪魔はさせないのです”

「あの一人の知り合いか・・・・・ならば、貴様も生贊にしてやううー！行けつ！！」

「「「「「「「おつー」「」「」「」「」「」」」」

迫つて来る人達を放置して、スケッチブックを仕舞つのです。

切り掛かってきた騎士さん達に、ディザスター殲滅者を一閃・・・・・それだ

けで、三田丸のような鎌に騎士さん達の下半身は消滅したのです。

「なつ、何だとー？」

「馬鹿な！？」

「“逃げないでください”です。橋が壊れちゃうので・・・・だめです”」

鎌の柄で、地面を叩き地面に五芒星を展開・・・・騎士さん達の足元にも五芒星が展開されたのです。

「「「「な、なんだー」」」

「“ヒクスキューショナー”」

触れるだけで対象を殺す呪力を込められた闇を作り出す魔法なのです。しかも、苦痛とその人にとつて最悪が再現される魔法なので、苦しみながら死んで行くのです。

「“呆気ないのですよ”」

「ひつ・・・・・・」

「“貴方達の本拠地を教えるのです”」

「わ、わかった！だから、命だけは・・・・・・」

「・・・・・・（）」

騎士さんを約束通り、生かしたまま賢者の石にかえてから、騎士さんに教わった場所に、騎士の賢者の石を使ってメテオスフォームを撃ち込んでやつたのです。

これで二人は安心なのですよ。

アリス Side

「今、街が一つ消滅しました。私、アリス・ルイーズ・オブ・ナヴァールが靈視いたしました」

「それは、いかなる神又はカンピオーネですか？」

「行使されたのは魔法域に達した魔術ですね。場所はドイツでした

「おそらくは、一週間前に報告された八人目の神殺しでしょう。

「あそこには魔術結社がありましたね」

「確かに、神を召喚しようとしていたはずです」

「では、神を召喚できたのか？」

「いえ。生贊に逃げられたと報生レが上がつてこまや」

「馬鹿だな」

「ええ」

確かに、愚かにも魔王たるカンピオーネに眼をつけられたるよつなことをしたのですから、彼等の死は血業血得で問題はありません。問題は民間人に被害が出ていることですね。

「ドイツに至急諜報員を送り込んでください……！」

「どうしました？」

景色が移り変わる。これは託宣かしら。

「街を生贊に召喚された空を飛ぶものがあまねく支配において蠅の女王、新たな神殺し……」

「プリンセス・アリス……おなか……」

「どうやら、最後の悪あがきで神を召喚したようですね」

「…………」

「なんて事だ……それに、召喚された神は……。  
ええ。おやじへ、ピックネームでしょうね。

アリス S. id e Out

## 新たな神？（後書き）

召喚されたのはあの方です。

「なんでわたしなのよっ！？」しかも、召喚された瞬間隕石による爆撃ってなんなのよ！？ ねえ、死にたいの？死にたいのよね！！」

（C.V.：ゴトウーサ様）

といった感じです。

## 異界の神との闘い1

神Side

全く、最悪な気分だわ。リオンとアゼルと一緒にお茶してたのよ？あのネガティブ魔王のアゼルの機嫌がどうなってることやら！－  
「ああ、神よ！」

「我等の願いを」

「ふふふ・・・・・・」

人間ごときにここまで虚偽にされるなんて久しぶりよ？それに、勝手に神殿みたいな所に召喚した上に、願いを叶えて貰えるとでも思つてているのかしら？

「我等の敵を倒し、我等をお助けてくだ・・・・・・ぞやああ－！－！」

「な、何をつ－！」

「うわやこつ……から、死になわこ……」

プラー（存在の力）を吸い取……効率悪いわね。それに姿が蠅人間…………あれ？ 色々おかしいわよ？

「つて、これ本体じゃない…………」

何がどうなつてるの？ ここはフアージアースじゃないの？ いや、有り得ない。世界結界が存在していないみたいだし。

「別世界？ でも、私の本体が顕現する程のプラーが無くなれば、この辺り一帯は消滅していくはずよね？」

とつあえず、姿はいつものにしましょ。」

それに、プラーを吸収出来ないわね。それも血を吸い取ったみたいなのよね。

「別世界と云つよつ、異世界ね。まあ、どうせなら楽しまなきゃ損よね。ふふふ」

「うわやこつ……から、死になわこ……」

「ぬのせこよね？ なんか変な音があるんですけど……ちよつと、なんなのよー。」

隕石が雨のように降つて来るんですけど？

「術者は・・・あそこね・・・遠距離転送の爆撃・・・いいわ、その喧嘩、かつてやるわ！――」

まずは邪魔な石つこを排除しないといけないわね。

「ヴァーニティワールド」

人のいないこの街と、街の上空にある魔法陣（別世界（異界や空間））を創りだし、纏めて握り潰す。

「綺麗になったわね」

後に残ったのは綺麗な更地だけよ。この私がやつたんだから当然ね。ふふふ、さあ、楽しい狩りの時間よ。

神SideOut

あれ、魔術が強制解除されたです。とりあえず、移動するのですよ。何か、危険な気がします。

転移術式・・・・・起動です。肉体をアストラル体に変更して、幽世・隠世に移動。幽世・隠世から常世・常夜に移動・・・・・

「見付けたわよ…」え？ いきなり攻撃が来たです！

「“なんなんですか！”」

スケッチブックを取り出して、ページをめくつて、ブンブンとスケチブックを振り回すのです。  
「こは幽世・隠世の森ですね。

「えっと…………なんなんですかと聞かれたら、答えてあげるのが世の情け、愛とじゅ…………って、何よこれっ！ 後ろにRの文字とか、だいたい二人いるでしちゃうがつ！？」

「？？？」

電波を受信したのです？ とりあえず、小首を傾げておくのです。

「“電波少女さんです？”」

きゅつ、きゅとスケッチブックに新しい文字を書いて見せるのです。

「違うわよっ！？ まあ、いいわ。 それより、貴女もなんだかんだいいって、この私をして余裕ねよ？」

「“頗る体調がいいのです”」

「…………」

「“それで、どちら様ですか？ 神のようですが、リーザと闘うでいいですか？”」

リーゼと同じ銀の髪をショートカットにして、悪戯好きそうな金の瞳、整った容姿が人形のようで綺麗なのです。服装はコスプレ制服（？）な格好です。

「神といえば神よね。古代神だけど・・・・・・そして、鬪つかどうかだけど・・・・・・殺るわよ！..」

「つー？ “リーゼは遠慮したいのです！”

両手でスケッチブックを掲げて、左右に振るのです。

「いや、可愛いけど却下よ」

「“むろ仕方ないのです。神殺しの魔王たるリーゼは、神とは殺されるか殺られるかなのです”」

「は？ 神殺しの魔王ですって？」

戦争開始なのです！

スケッチブックにかかる六芒星の魔法陣に呪力を注ぎ込み、発動させるのです。

「ちょっと

発動させたのはヴォルケーノという魔術ではない魔法。それは、六

芒星からはい出てきて、紅蓮の炎で出来た深紅の猫。

『行くのです』

「二や一、二や一、

「くつ！ ちよ、何よその威力！」

猫の引っかきが、大地に裂け目を作り出したのです。しかも、その裂け目から炎蛇が多数出現し、暴れてるです。森も火の海なのです。

「ちつ、邪魔よスター ライト」

多数の光の奔流が炎蛇を消し飛ばして、自身はヴォルケーノを捕まえたのです。

「フシャーーー？」

「熱いわね。でも、それだけよ

腕を燃やされながら、ぐちゅっと握り潰されたのです。本当に強い神なのですよ。

「ふふふ、驚いた。本体である私に、腕一本とはいえ、焼き尽くすなんてね。んつ・・・・・よし」

腕をちぎったと思ったたら、瞬時に再生したのです・・・・・・・どんな生命力してるのですか？といつが、数千度の塊を握り潰すなんて非常識なのです。

「いや、そんなのをスケッチブックに書いた魔法陣から呼び出すあんたも充分、非常識よ」

「・・・・・・・」

「“否定できないのです。そもそも、私達カンピオーネは非常識の塊だったのです”」

しかし、これは眞面目にやらないと云ひきのです。

「まさか人間の闇夜の魔法使い（ナイト・ウィザード）がここまでやるなんて・・・・・・この世界は化け物だらけなのかしら？私達、古代神に匹敵する力・・・・・・あれ、これは神力？なら、この娘は転生者なのかしら？」

まあ、どうちにしろ殺すだけよね。感謝なさい。このベル＝ゼフ  
アーが本気をだして貴女を殺してあげる」

「“全力でお断りなのです”」

これはこちらも全力全快でいかないと話にならないのです。

「“なり、」こちらも正真正銘、全力全壊なのです。だから、少々お待ち頂くのです”

「ま、敵が待つてくれると思つてゐるのかしら？あいつは・・・まあ元気だもん。」

“負けるのが恐いのです？勝つ自信があるなら、待つののがラスボスの威儀というか、格下相手に待たないのは神として恥ずかしく無いのかとリーゼは思うのです”

激甘なのです。でも、顔を真っ赤にして頬を膨らませるこの神様は可愛いのです。

「早くなさい」

「“はいです”」

深呼吸して、右田の包帯を外して、完全無欠な最強のカンピオーネのイメージを想像し、自身を作り替える言靈を詠唱するです。

「私は冥府魔道を進む者なり！」

自分の声で目標を発する。

「我が霸道の前に立ち塞がる者をことごとく打ち碎く者なり！」  
宣誓を行つていくと身体が作り替えられ、身体の奥底から力が沸いて来る。

「人であろうと、神であろうと、魔王であろうと、我が霸道ならば、ありとあらゆる生きとし生きるものに死を与えん！……！」

「……・出鱈田なぐらい跳ね上がったわね・……・

「我が道は冥府魔道、修羅の道・……・ですっ！」

右手にスケッチブック、左手に三日月の鎌殲滅者を持つて、神代の闘いを再現する。

「いいわよ・……・やつてやるひじじゃない！……！」

動いたのは同時、リーゼは重力に重力を重ね合わせ作り出したブラ

（ディザスター）

ツクホールを賢者の石と虚無の石で、強化して圧縮した闇の球体をスケッチブックのページを多数使って、前方に作り出したのです。神は金色の色の球体・・・・・・・・神聖な太陽のような物を左手に作り出して行くのです。

この工程を一秒にも満たない間に、お互いが作り上げたのです。

「ディヴァインクロナツ！」「ブラックホール・フェアリーズ！」

リーゼはスケッチブックから闇の球体を放ち、神は光の球体を左手から放つたのです。光と闇の球体がリーゼ達の真ん中でぶつかり合ひ、対極図のように混じり合い、お互いを喰らいあつて消滅したのです。

「やるわ・・・・・・・・」

停滞空間を使い、消滅と同時に接近し、  
・・・・・  
ディザスター  
殲滅者を振り下ろす・・・・・

「ちっ、舐めるんじゃ・・・・・・・・」

・・です！

神が障壁を開け、  
ディザスター  
殲滅者が障壁に触れた瞬間に障壁は消滅。迫る刃に身体を捻つて避けようとする。

凄い反応速度なのです・・・・・でも、  
ディザスター  
殲滅者からは逃れられないのですっ！

「喰らう付け殲滅者！・・・

「ぐつ、嘘でしょっ！完全に避けたわよ！」

神はさすがで、心臓を狙ったのに腕一本しか奪えなかつたのです。

「再生…………しないですって……」

「虚無の力は神にも有効なのですー。」

「再生不可つて、チート過ぎるわよーつうへ、レバ打ちもやつてやろ  
うじやない！」

身体を回転させ、一撃目を放つのです。当然、回避不可なので、避けた神にまた中たるはずなのですが。

「甘いわよー『運命改变』」

「避けられたのですー！？」

「せつめのお返しよー。」

「がはつーー？」

うつ、痛いです。お腹を蹴られて吹き飛ばされたのですから仕方ありません。

「運命に介入しての改变は有効なようね

「やうなのです。でも、」こちらもまだまだやるのです

「でしようね。さすがに神殺しと豪語するだけの事はあるわ。素人のようだけどね」

「否定しないのです」

戦闘訓練なんてやつてないのです。

「まあ、手加減はしないわ。ヴァーニティワールド」

「と、わつ、ひゅつ」

嫌な感じがする所を、停滞空間で止めて殲滅者ディザスターで切り伏せ、無効化するのです。

「反則よね・・・・・でも、これならどうかしら?」

神の手に数十メートルある巨大な金色の槍が出来ているのですつ! いつの間にか・・・・・作つたのですか!?

「これで終わりよ。ディヴァインクロナ・ザ・ランス」

「くつ、諦めないのですつ!?」

柏木を打つて、地面上に手を付き権能による鍊成を開始するのです。

「黄金の壁ですって? 確かに完全物質の黄金なら行けるかもしけないけど、これは貫通力をメインにあげたつえ、概念まで付与した物よ。だから、無駄ね」

「諦めたらそこで終わりなのですよ!—」

実際、何枚もの黄金の壁が貫かれていつているです。まずい・・・・・停滞空間だけじゃ避けきれないし・・・・・何か無いか・・・

・・・何か・・・・・あつたのです！

ベルSide

「ふふ・・・・・・これで終わりね。確かに人間にしては強かつたけど・・・・・・あの一撃を耐える人間なんていないし、確実に死んだわね」

目の前には今なお、光り輝いていて、地面を埋め尽くしているティヴァインコロナ・ザ・ランス。

「つて、あれ？これって確か埋め負けフラグじゃなかつたかしら？いえ、そんなはず無いわね・・・・・・うん」

「あるよ？貫けグングニル」

「なつ！？」

私の胸から槍の尖端が生えてきた。まさか、背後からなんて・・・  
・油断したわね。

「どうやって助かったのかしら？」

「『時の支配者』と女神フレイヤの権能『運命操作』……です。『時の支配者』で時間を止めて、『運命操作』で失敗する確率を否定し続けたのです。」

「追撃をかけておくべきだつたわね…………でも…………まだまだヤヘル…………わ…………なんでアンタがそれを使えるのよー！？」

「解析しましたです！」

「ふわけんじや無いわよー」の化け物めつ！？

小娘の手には私が先程作り出した、ディヴァインクロノナ・ザ・ランスが一本、存在した。

「行くですっ！」

「舐めるなつー？ヴァーティワールド・ジ・アンコミテッシュドー！」

「

虚無の属性を持つ、世界を作り出して閉じ込め、崩壊せしトイヴァインコロナ・ザ・ランスを無効化せん。

「ちえりおーです」

「ぐつ、意味違うわよー！」

背後からの蹴りを避けつつ、カウンターで蹴り飛ばしてやる。

「ぐふつ！？ 痛、痛あつ、痛あ、ああああつー！」

「…………素人ねアンタ…………」

ゴロゴロとのたうちまっている小娘を見る。

「仕方無いのです。カンピオーネになつてゐるのに気付いたのは、こないだなのです」

「まあ、手加減はしないわ。この槍に力をどんどん吸われているんだからね」

槍に私の中に存在するプランナが吸われているのが判る。長引けば私が負ける。

「はいです。なので奥の手、他人任せなのです！ 我が身に來たれ『ヴァルキュリア 戦乙女』」

「我が名は槍を司る戦乙女ゲルヒルデ。召喚に応じ、馳せ参じました。これより我が力はマスターの物」

召喚された翼ある存在は、小娘の中に消えた。それを表すように、小娘にも純白の翼が生えて・・・・直ぐに黒く染まつた。

「ちよつ、反則でしょ・・・・」

融合した瞬間に、小娘は視界から消えて、私の右上から踵落としを放つて來た。

「ぐつ、メイオみたいな存在ねつ！！ 嫌になるわ、ねつ！」

腕に付けている攻撃魔装ロイヤルプリズムを発動。日輪の如く光り輝く光球を両腕、両脚に纏わせて小娘の攻撃をクロスした腕でガード。

「《運命操作》です」

「甘い《運命改変》」

お互いが運命を操作改変しながら、近距離で殴り合つ。度重なる運命の操作と改変により、捩曲げられる運命は幽世・隠世の空間を変革させていく。

私の攻撃が中たりやしない。戦闘技術も戦乙女ヴァルキュリアを取り込んだ事で、達人を軽く超えてるし・・・・・何より、時間までバラバラになりだしてるわね。

「はつー」

「わわつー」

確かに捕らえ、殴ったはずなのに、空を切る私の拳。

「やうやくー。」

「甘いです！」

おかしな反応があつた場所を蹴ると、肘と膝で私の腕を挟んで、折つてきた。瞬時に再生はできるけど・・・・・痛いわね。

それから、私達は近距離で激しく殴り合いながら、魔法を撃ち合つていく。

ベルSide Out

闘いを初めて数十日が立ちました。今だに私達の闘いは続いています。

「いい加減死になさいつ！」

「それはこっちのセリフ…………です！」

私はディヴァインコロナ・ザ・ランスを圧縮した物を握り、構えます。周りにも魔王球を多数作り出して準備も出来てます。

「そろそろ決着を付けましょうか

「はいです」

何か、凄く嫌な予感がするです。

「《あまねく、滅びあれ》」

「つー行くです！」

数々の魔法を打ち出しますが、その全てが神に中たる前に消滅して行くです。それに、どんどん私の力・・・・・生命力も削られています。

「これはまずいのですつー！」

「これはね、生命力が低い物なら、問答無用で消滅させる力よ。今弱った貴女になら効くでしょう？」ほつほつ

「心臓を貫かれていることよくやるのです」

時間を止めて、神に向かつて接近するです。でも、その間もどんどん生命力が減つて行くです。

接近したら運命を操り、殴りかかるです。

「中たるかつー！」

「つうーーー！」

神の反撃で、リーゼは右腕を消されたです。右腕を失つた痛みを我慢して、出来た隙をつき、心臓に突き刺さつたままのグングールに変形した殲滅者を掴み、力を解放するです。

「試行のルーン」

オーディンから篡奪した権能で、  
殲滅者に刻まれているルーンの力  
を解放するです。

「ルーハ、ナギー！？」

「神々のいましめを解き放たれし、深淵よりも黒き虚無の刃よ、我が力、我が身となりて、共に滅びを『えよ、神々の魂すらも打ち碎かん!』

**殲滅者の虚無の力を完全に解き放つ。**

「神を喰らひつゝ者つーー！」

ディザスター  
殲滅者を通して、神の体内に直接、神を殺しその力を喰らう。言靈  
を体内に放出し、体内を直接犯していくのです。

「アベガウルハ、ハレバ...」

お互いがお互いに相手の力に犯されていくなか、なんとか耐えていくです。

少しして決着が付きました。・・・・・です。

「くそつ・・・・・・・・覚えてなさい・・・・・・・・」

神は光となつて消えて、光は私の体内に入り、新たな神力・・・・・・  
・多分、新たな権能を手に入れたのです。

それにしても、リーゼは神と闘つと必ず何処かが壊れるのです。さて、少し、お休みなのです。

そして、リーゼは回復の魔法を設置して、クレーターと荒野の中、眠りに付きました。

「やあ、おはよつ」

「んつ、ニニスマビニですか?」

見渡す限り、真っ白な空間なのです。

「リジは狭間よ。私はパンドラ、貴女達カンピオーネの母よ」

「お母さん?」

「ナリナヘー」

「ん~」

頭を撫でてくれる手が気持ちいのです。

「貴女をここに呼んだ理由は、なんとか知らないけど、別世界の神。  
・・・・・古代神が召喚されたのよ」

「古代神？」

「ええ。貴女がさっきまで鬪っていた神がそう。彼女は空をあまね  
く支配する蠅の女王ベール＝ゼファーツていつて、こっちの世界じ  
や、ベルゼブブの変異種になるのかしら？まあ、これは別にいいわ  
ね。問題は、彼女達古代神は神話に一切影響されないで、その全て  
がまつろわぬ神となり、強力無比な連中になるわ」

倒せばいいのかな？でも、強かつたけど。

「ぶっちゃけ、何度でも直ぐに蘇るチート神なのよね。しかも、本  
体だから、正に歩く災厄よね~」

「あ、あの・・・」

「つと、いけないいけない。まあ、本題なんだけど、彼女の権能が  
欲しいわよね？」

権能を得るのは、一人で神に勝利したカンピオーネの当然の権利な  
のです。

「はいです。やっぱり、欲しいです。駄目なのです？」

「だつてさベルちゃん」

「ちつ、仕方ないわね。負けたのは事実なんだし・・・・・いいわ。私の力をあげる。郷に入つては郷に従えとあの馬鹿も云つていたしね」

さつきまで闘つていた神がいました。

「じゃあ、ベルちゃん達、異界の神も術式に組み込んでいます」「ええ、お願い。帰る方法の探索もね」

「お任せくださいな」

それについても、異世界の神だったのですね。

「さて、私が貴女にあげる力はこの三つよ。今回は私が選ばせてもらつたわ。この裏界の大公に勝つんだから、それなりの力をあげる」

「あ、ありがとうございます?」

「感謝なさい。権能は『魔界変成』『従属の魔眼』『魔王顯現』よ。『魔界変成』は自らの魔力・・・・・・こっちじじゃ、呪力ね。呪力を周りにばらまき、自分に都合のいい空間に作りえる力よ。これにより力は上がるわよ。

次に『従属の魔眼』は、相手の肉体と精神を強制的に従属させる権能よ。注意は、神に使う場合、多くて三回、下手したら一回くらいしか効かないわ。それに、自分を傷付けをせるとかは抵抗されて無理ね。

最後に『魔王顯現』は、自身の力・・・・・貴女達カンピオーネ

なら、一時的だけど、篡奪した権能の元となる神の力・・・・。呪力などがそのまま手に入るわ。権能は無理だけどね。むしろ、権能の及ぼす力は上がるでしょうね。貴女の場合、最初に言靈で自身を変質させていたから、それと同時に使えばいいわ。それに、こっちなら詠唱なんていらないし便利よ。

これで終わりと・・・・全く、落し子を作るより大変ね

確かに、私の中に入っていた力が明確になつた気がするです。

「あ、あの・・・・。ありがとうございます」

「別にお礼なんていいわよ。これがこの世界のルールと云うなら従うだけよ。それに、面白いルールじゃない。とつても楽しくなりそうよ・・・・ふふふ

「こ、この人(?)、こ、怖い・・・・です。

「さて、貴女はそろそろ戻りなさい。ここは現実世界と違つ時間で動いているんだからね」

「はい。お休みなさいです・・・・」

「ええ、お休みなさい。また会いましょう」

こつじて、リーゼは再度意識を失い、この狭間での会話を忘れてしまいましたのです。



## 異界の神との闘い2（後書き）

現在、リーゼが倒した神

フレイヤ + クロノス

オーディン

ベル＝ゼファー（ベルゼブブ）

得た権能

『時の支配者』：時を自由に操れる

『空間操作』：空間を操れる（覚醒不完全）

『黄金精製』：完全物質純度100%の黄金を創りだせる。形は自由

『叡智の瞳』：魔術や魔法、物、生物などを解析し理解できる。

『運命操作』：運命を自由に操作出来る。ただし、出来る範囲は制限あり。

『従属の魔眼』：対象を支配し従属させる。神と神殺しには1～3回くらいしか効かない。無論、抵抗可能。未覚醒。

『魔界変成』：空間を自身の都合の良いように変更する。未覚醒。

『魔王顯現』：倒して篡奪した神の元の力を一時的に纏めて力を增幅する。具体的に云うと、リーゼなら神4柱分の力を一度に発せられる。未覚醒。

結構酷い権能が増えて参りました。

ベルから頂いた権能はナイトウイザードの大いなる者から一部頂きました。

## ラスボスとい」対面？

『気が付いたら知らない上空…………宙に近い場所なのです。しかも、現在、落下中なのです。

『「めん、転送場所間違っちゃった しばらくは大丈夫にしておいたからどうにかしてね、義母より』

多分、パンドラ母様のせいです…………よく覚えて無いけど。

「ガルキュリア  
戦乙女」

権能を使って、翼を作りだし空に漂つのです。

「ここは空高く寒いのです」

キヨロキヨロと回りを見てみると、デブリが沢山ありますので、そちらで休憩するのです。

何か浮き島みたいな場所があつたのです。中を調べてみると、神刀を抱いて眠っている神様を靈視したのです。

『我が宿敵の娘よ、何用だ？』

そしたら、凄く恐い気配がする神様から念話が来たです！

「パンドラ母様のせいで迷い込んだだけなので、特に用は無いのです。ただ、休憩によつただけなので……」

『さうか…………アヤツのせいなら仕方あるまい。ならば小娘よ、しばし我的暇潰しに付き合え』

「内容によるです」

『ただ、小娘とパスを繋げ、我はここから汝を介して外を見たいだけよ。報酬として、我が力の一部をくれてやる…………悪い話ではなかろう』

「私の精神や肉体が安全なら別にいいのです」

『契約は成立だ』

すると、リーゼの中に巨大な神力と誰かの意識が流れ込んで来たのです。

『今から我的武技を授ける。しかと覚えよ』

「わわつ！？」

それから、身体が勝手に動いて色々な動作を身体に直接覚えさせられたのです。

「丹口が経つて、ようやく身体を返してくれたのです。

『それでは私は出ていく。我と縁が深い場所に汝を送る』

「お願いするです」

結局、武技を教えて貰つただけで、ローザの身体から出て行ったので安心です。

転送された場所はどこかの島です。そして、湖の辺に剣が突き刺さっていたのです。

「えい」「

とりあえず、剣を抜いて持つて見ましたが、剣は崩れていったのです。それと同時に、さつきまで会っていた神様と似た気配の神様が現れたのです。

「封印が解けたか……貴様が我を解放したのか？」

「そうなるです」

出て来た神様は、光り輝く黄金の剣を持つてたです。これも、剣の形こそ違うけど、あの神様に似ています。ただ、姿はフルプレートアーマーなのです。

「ならば神殺しよ、戦おつか

「とりあえず、回復が先なのでは無いですか？」

「こりぬ世話だつ！ 我は騎士王アーサー・ベンデラゴン、敵の情けなど受けぬ！」

「じゃあ、リーゼが勝つたらその力、貰うのですよ~。」

「良かうひー では、参るぞ我が仇敵よー！」

「私は冥府魔道を進む者なり！」

言靈を発つして自身を改変する。

「我が霸道の前に立ち塞がる者を」とく打ち碎く者なり！」

身体が作り替えたために、身体の奥底から力が沸いて来る。

「人であろうと、神であろうと、魔王であろうが、我が霸道ならば、あつとあらゆる生きとし生けるものに死を『えん……！』

「準備が出来たか。 では、参るー！」

瞬きをする間に接近して来たアーサーは、黄金の剣…………エクスカリバーを振り下ろして來たです。リーゼの腕は無意識に跳ね上がり、エクスカリバーを殲滅者<sup>ディザスター</sup>で受け止めたのです。

「ふはは、やるでは無いか！ それでこそ我が宿敵よー 我を封印した奴らにも目に物見せてくれるわっ！」

「……で貴方は終わりなのです！」

力の差は歴然で、リーゼは自ら吹き飛ばされて距離を取るのです。

「我が時よ、駆け抜けよ」

リーゼの時の流れを速くして、自分だけの空間を作りだすのです。この時、《魔界变成》と言つ機能が使用出来ると思ったので使ってみたのです。

すると、世界その物が変質し、空には深紅の月と巨大な歯車達。更には宙に浮いている数万の魔導書達、地面は10cmくらいまで水に使つている…………かなり混沌としている場所になつたのです。

「なんだこれは…………まあ、よい。来たれ我が軍勢よ！ 我が敵を蹂躪せよ！」

大量の騎士がアーサーの召喚に答えて、水面からはじめて来るよう現れた。

「戦乙女さん達、リーゼの元に馳せ参じるのです！」

こちらも負けじと大量の戦乙女達を召喚したのです。

「美しい…………我が物にしたいな」

「残念ながら、この子達は貴方を導く死神なのです！」

睨み合ひの騎馬に乗つた方に近い騎士と二百くらゐの戦乙女がリーゼ達の号令により、激突を開始したのです。

ヴァルキーリア

「ヴァルキーリア

「ヴァルキーリア

ただ、リーゼを目標として突撃して来る騎士達に、戦乙女達は光り輝く槍を作り出して、空中から投擲するのです。その槍が水面の下にある地面に突き刺さると光の爆発が起きて、大量の兵を消し飛ばして消滅させて行く。

「我が兵達よ、畏れず突き進め！」

アーサーは自身もこちらに突撃を駆けて来て、最前列で光り輝く槍をエクスカリバーで切り裂いて行くのです。しかし、英雄が相手だからか、今回の戦乙女達は苛烈に攻め、普段以上の力を発しているのか、アーサー以外の敵はどんどん減つていいくです。

「ディイヴァイン・クロナ・ザ・ランス」

**殲滅者**で地面を突くと同時に神を殺す力を持つ魔法を撃ち込む。

「くつ、切り裂けエクスカリバー！」

アーサーもこれが魔法の粹であり、神を殺す力があるのを理解したのか、エクスカリバーを振り下ろし、光の刃を作り出してディヴィアインコロナ・ザ・ランスと激突し、激しいぶつかり合いを展開しているです。

その間に、リーセはトランプとして様々な仕掛けを施したのです。もちろん、呪力を込め続けている状態で行つたのです。

だからか、リーゼの魔法を切り裂きこちらに進んで来たのです。その時、リーゼは地面に鎌で叩いてトラップを発動させるです。

「『』、トラップかっ！」

「ヴァーニティワールド・ジ・アンコリッシュド」

アーサーの足元に虚無の空間がいきなり現れて、アーサーやその兵達を飲み込んでいく。

「やつてくれるー！」

その後も、爆発やウォルケーノ（炎の猫）、戦乙女達の突撃、運命改变による援護を入れて激しい戦いが続いていくのです。

どれくらいか解らない時間が過ぎて、ボロボロになりながらも全ての戦乙女ヴァルギュリアを葬り、私の前へと現れたのです。それも、今度は下がれないので。

「さあ、楽しく切り合おうぞー！」

「お断りなのですっ！」

サイドスッテープで避けた瞬間、さつきまでリーゼが居た場所にエクスカリバーが振り下ろされ、水面毎地面が切り裂かれ、深い亀裂が出来たのです。

「我が剣、カリバーは約束された勝利の剣だ。故に、正々堂々となら我に負けは無い！」

連續で放たれる剣技を予測し、時間を速くした身体で左右上下に素

早く移動してなんとか凌いでいくのです。あの神様から武技を教わらなかつたら殺されていたのです。

「なら、その剣を排除すれば良いのです！」

元の神話のせいか、あの神様に教えて貰つた武技に全く同じなので、三日月の部分にエクスカリバーを合わせて、弾き飛ばすのです。

「させるか！」

「絶対成功させるです！」

運命改变の力を使い、失敗する未来を潰していくです。それが例え呪力を大量に消費しようとも構わないのです。

「私の勝ちです！」

「まだだ、我は死んでおらん！？」

「いいえ、これでチェックメイトなのです！」

ディザスター  
殲滅者でアーサーを殴り付け、落ちてきた神剣エクスカリバーを持つて、それをアーサーに振り下ろすです！

「馬鹿な、何故使える！？」

「エクス——カリバ——！」

残りの呪力を有りつたけエクスカリバーに込めると、光り輝く黄金の剣は黒く渦々しく染まり、本来の救世の神刀正反対の性質へと変

質したようなのです。更に、形も剣から刀へと変化したです。

「有り得ぬ……」

漆黒の神刀エクスカリバーはアーサーを切り裂いて砕き、その力を吸収しついたです。

「リーゼの勝利です！」

「覚えておれ…………」

負け犬の遠吠えを残して、アーサーは消えて行き、約束通り神力が流れ込んで来たのです。

『本来なら新しい権能は入らないけど、本人との約束とこの前の詫びも兼ねて権能をあげるね。優しい義母より』

「弱つてたから本来は駄目なのです？ まあ、神刀を手に入れたのでどっちにしろプラスなのです」

アーサーの骸があつた辺りから残つていた鞘を掘り出して、エクスカリバーに合わせると、鞘も変化して、丁度良い感じになつたのです。

「ディザスター  
殲滅者」とエクスカリバーは分けて使……う……で……

また声が無くなつたのです。先程の戦いのせいか、眼も本調子では無いので包帯を巻いておくのです。どうせなら、修行がてらに両目に巻いておくのです。エクスカリバーは杖みたいにして持つていく

です。

とりあえず、お休みなのです。呪力を回復させないと、どうしようも無いのですよ。

Side アリス・ルイーズ・オブ・ナヴァール

おかしい、私とアレクで掛けたアーサー王の封印に異変があります。

「ミス・ヒリクソン」

「…………」

「直ちにアーサー王の封印を調べてトセ!」

「了解しました」

「これで後は報告次第ですね。アレクはどう動くでしょうか?」

Side アレクサンドル

俺は先程サー・アイスマンから上がった報告を読んでいる。

「では、アーサー王は変わり無くその場にいるのだな？」

「はい。外側の封印からですが、間違い無くアーサー王の神力を確認しました」

「中は判らないか……」

「はい。あの封印は、異空間を作り出しているような物ですから、外側からでは判りません。それに、アーサー王の封印が解ければ封印は壊されているはずです」

「そつか。引き続き警戒を頼む

「了解しました」

あの化け物を倒す算段を考えねば……いや、それよりあの神祖の方が先だな。

Side Out

ラスボスとい」対面?（後書き）

やつねりつけど氣にしません。

## 大食い魔王が顕れた！

森の中、目覚めたリーゼはこから抜け出せません。右に行つても、左に行つても元の泉に戻つてしまふのです。リーゼは一生このままなのです？

『娘よ、汝の権能と我が神刀と対になる汝の神刀を使って空間を切り裂けば良いのでは無いか？』

成る程、確かに出来そうなのです。ありがとうございます。

『いや、礼は良い。我も一週間以上同じこの景色は見飽きた。せつかくの楽しみなのだから、早く行くのだ』

ではでは、行くです！

漆黒の神刀を構えたりーゼは、適当にエクスカリバーで空間を切り裂いて、出来た空間の中に飛び込んだのです。

リーゼは空間操作の権能を漆黒の神刀エクスカリバーを触媒にする事で多少なりとも使えるようになつたのです。だから、空間狭間から別空間を繋げて何も考えずに出了のです。

「がぼがぼ（うへへみへへ！ たしゅけ）じほじほ……」

『汝は存外抜けてあるな。時を止めている汝は死なんのだから、私は助けんぞ。その方が面白いしの』

死ななくても苦しいのです！　この神様、余り役に絶たないです！

『いや、汝が忘れてるかもしけんが、汝は神殺しの魔王ぞ？　何故、神殺しの魔王を殺す我が汝を助けると思うのだ？』

武技を教えてくれたり、浮き島から助けてくれたから？

『それは報酬だろ？　まあ、我は汝を通して暇潰しが出来たら良いので、助言は気が向いたらしてやる。しかし、この程度なんとも無かるつ』

致し方無いのです…………なら、全力でこの深海から抜け出すだけなのです。

「（シーラカンスを初め、皆さんに申し訳無いのですが…………全  
身全靈でぶつた斬るのです！　全力全壊つ、エクス、カリバー  
——つー）」

漆黒の光がエクスカリバーの軌跡を追うように出て行き、まるで旧約聖書で海が分断された様に別れていったのです。途中にあつた島も分断して地平線の彼方までもです。

「（ちゅうひやり過ぎたのです…………とつあえず、脱出……  
です）」

翼を広げて、飛び立つち近くにあつた陸地に上陸したのです。

「何処でしょうか？ 美味しそうな匂いがそこら中にかいするのです。

それに入が多くて大変なのですが、どこか慌ただしいのです。

「お嬢ちゃん、美味しい肉まん買わないか？」

「お金、無い。換金場所か質屋はある？」

「あ～～おじさん英語解らないね」

カンピオーネの標準装備の千の言靈じや、書けないから仕方ないです。だから、翻訳魔法を使ってからもつ一度見せると、問題無く理解してくれたです。

「質屋なら、あそこの角を曲がるね」

「“ ありがとう”」

言われた通りに道を進むと、質屋に入つて行くです。

「ようこそ、質屋陸家へ。今日はどんな要望ですか？」

「“ これ買い取って欲しい”」

ポケットに手を入れて、黄金の棒やアクセサリーを数点作り出して手渡すです。

「これは魔術品ですね…………素晴らしい…………」

「“純度100%の黄金で出来てます。貴方はこれにいくらの  
価値を付けるですか？”

「どうですか…………一億円でどうですか？」

安いかどうか解らないから、元もタダなので別にいいです。

「構いません。口座は無いので現金でお願いします。”

「げ、現金ですか…………小切手をお願いします。そこの銀行で受け取れますから」

「“わかった”」

それから、銀行で小切手を交換してお金を異空間に繋げたポケット  
に仕舞つて、買い物に出掛けたのです。

先程の質屋。

「これは報告せねば…………こうしゃ…………五嶽聖教の方です  
ね。丁度よかつた」

「どうした？」

入って来たのは14歳くらいの少年だった。

「先程、強大な呪力を感じたがそれに関係があるのか?」

「はい、先程小さな白人の童がこれを売りに来まして……」

「これ程の呪力の籠つた品は素晴らしい。これは五嶽聖教の方で買  
い取らう。売り手に関する情報を探る」

「あちらの銀行に向かってはづです」

店主は商品を渡し、見返りに三倍の額を受け取り、リーゼの情報を  
流した。

銀行から出たら変な気配がしたので、空間移動をしたのです。す  
ると、中国と並ぶ国の中華人民共和国江西省にやつて来たみたいです。

「うるさいですね」

何かとっても豪華そうな場所ですが、気にしないのです。

キラキラ、ピカピカで坪とか掛け軸とか凄く高そうなのです。

「こりひしゃいませ…………失礼ですが、お金はいざりますか？」

「“あるよ”」

ポケットから100元の札束を一つ出すと、店員の態度が変わったのです。

「失礼しました。こちらがメニューになりますので、お先にご注文頂いて、あちらで服をお買い求めください。その濡れた格好では風邪を引いてしまいます」

確かにリーゼの格好はボロボロの濡れ濡れで、浮浪児の様な格好なのです。

「“わかったのです”」

適当にオススメを注文してから、服屋さんに行き、店員さんにお金を見せてお任せすると、奥に連れていかれ、揉みくちゃにされながら徹底的に洗われて、着せ替え人形にされて、ようやく深紅のチャイナドレス（龍の絵柄入り）を三着、900万元で購入したのです。（絵柄的にはシャナ修行時代に着ていた奴）

「お腹空いたのです

気分的なのですが。

わざわざのお店で案内された先には、ぐるぐると回るテーブルの上に乗せられた大量の料理が乗せられているのです。

早速、席に着いて神様にお祈り（留置）をして、『ご飯を食べます。

「 もさゆ もさゆ、 はむはむ」

肉まん、フカヒレスープ、フカヒレラーメン、麻婆豆腐、ビビンバ、水餃子などを次々と食べて行くのです。

『神殺しが神様に感謝するのは可笑しいが…………そんな事より、我も食べてみたくなつた。味覚を繋げるが良いか?』

「 もさゆ もさゆ（良いですよ）」

『では…………以外に行けるな…………』

「（どれだけ食べるんだ？　というか、あの小さな身体の何処に入っている！？　しかも、冗談で進めた満漢全席…………化け物め…………）」

次々と出て来る料理を食べて、リーゼも神様も満足した時には食べ始めて三時間が経過していたの。

「あ、ありがとうございました。お支払いは三十万元です

「 “予想外に高い”ですか…………一、二、三、四…………”

睨まれたので、慌てて百元札の束を取り出して、数えて行くのです。

「（何処から出したんだ！？）」

「“どうぞですか”」

「確かに…………頂きました。またのお越しをお待ちしております」

引き攣つた笑顔で見送られたリーゼは、宿屋に向かったのです。

宿屋も高そうな所に来たのです。

「いらっしゃい」

「“子供一人、大人一人、ふかふかのベットを所望するのです”」

札束を店員の目の前に置くと、丁寧に応対してくれました。

「スイートルームでよろしいですか？」

「“はいです”」

「では、いらっしゃい」

案内された部屋は廬山が一望出来る、とても景色のいい部屋だったのです。

「ヴァルキュリア  
“戦乙女”一体は護衛なのです。後はトラップでも仕掛けて置くの

です”

部屋をひょいとした要塞にから、リーゼは柔らかい御布団へダ  
イブしようとしたのです。

『修練だ』

“面倒なのです……”

『一回サボれば三回だぞ？』

「…………」

仕方ないので、神様とイメージで戦つのです。

三時間後、刀だけで戦った為か、ボロボロに負けたリーゼはシャ  
ワーで汗を流して、広いお風呂で泳いだ後、ベットに飛び込んで、  
死体のように眠つたのです。

明日は日本を日指すのです。

起きたら大変な事になつていていたですよ。リーゼの部屋に招いたはずの無い男の人達が沢山倒れている気配がするのです。

「わんわんお~~~~~」

「???」

とりあえず、生き残りの人に挨拶して見たら、返事が聞こえ無いのです。それにも、いつの間にか女の子の部屋に夜遅くか朝早くか判らないけど押し込んできた…………つまりあれなのです。

「『』の口づけの方々は、リーゼに夜這いをしに來たのですね”

「違ひつーーー！」

「そうですか、貴方にそんな趣味があつたとは師である私は知りませんでした。これは矯正が必要な様ですね」

む、綺麗な女性の声がしたのです。

「だいたい、師父が行けと言つたんじゃないですか。僕は推定と言え、魔王たるカンピオーネに近づきたくなかったのに…………」

「黙りなさい。『』の羅、翠蓮に意見する氣ですか？」

「滅相もありません」

「よろしく」

それにして、片手間に襲つて来る戦乙女ガアルキココを殺したのです。それも、カウンターの一撃みたいなのです。

「さて、貴女が八人目のカンピオーネですね」

「いやいや」

「我が領地で暴れた事に付いて聴きに来ました」

「“暴れた覚えは無いのです”」

「島毎海を断ち切ったのは貴女でしょう」

「“あれは深海から脱出するためになつただけなのです”」

正直に告白しながら、戦闘準備をするのです。具体的には隣に寝かしていた漆黒（破滅）の神刀エクスカリバーを手に取るです。

「さすがカンピオーネ、脱出の為だけに海を悪とは流石です」

「本来なら私と戦えと言つ所ですが、今回はこの品に免じて赦してあげましょう。まつるわぬ神との戦いが控えていますから、運が良かつたですね」

「“まつるわぬ神はビリでもいいけど、アクセサリーが欲しいなら

作るです。被害の補填にでも宛ててください”です”

インゴットを数個とイヤリングのセットを渡してあげたです。

“いい心掛けです。何かあれば聞いてあげましょう”

“日本の生き方が知りたいです。日本に形見の手紙を届けないと  
いけないので……”

“分かりました。弟子よ、この娘を日本へ行く手配をしてあげなさい”

「了解です」

ロツコーンさんが携帯で何か連絡を入れているです。

“次に会う時には、今度試合ましょう。ただし、私の獲物を取らな  
いよう”

“獲物は何？”

「孫悟空です」

“出来る限り気をつけるですが、売られた喧嘩は買うですよ”

“それは構いません。そうなれば、私は貴女と試合までです”

“うん、覚えておくです”

そんな会話をしていると、ロツコーンさんがこいつにやつて來たです。

だから、お姉さんの後ろに隠れたのです。

「可愛そつこ…………やはり、後でお仕置きですね」

「いや、違います。マジで勘弁してください！ そもそも魔王たる御身にそのような事をする前に塵と消されます。この女ヴァルキュリアだつてなんとか勝てたくらいなんですから！」

「確かにそうですが、どちらこしら修行ですね。そつだ、送るついでに下見をかねて貴方も日本に行きなさい。その間、彼女に鍛えて貰いなさい。実戦訓練が出来て丁度いいでしょ」「う

「“いいですか？ 確かにリーゼは地理とかよく解らないので、助かるです”」「

「ええ、貴女の侍女達が丁度いい感じみたいですから。ああ、襲つて来たら殺して構いませんから」

「“了解”」「

「やつぱり勝手に決まつて行く……」

旅のお供が出来たのです。手紙自体は急いで無いので取り敢えず、観光からなのです。

という訳で、羅・翠蓮さんと陸・鷹化さんの三人で険しい道を進み、廬山の山奥にやつて來たのです。

「此処から更に険しくなりますが修行場所には良いです」

「取り敢えずは階段ですけどね」

目の前には数千か数万は有りそうな階段があるです。それも、木々のトンネルが出来るほどの中なのです。

「“頑張ります”」

一段一段、しつかりと確認して登つて行くのですが、やっぱり見えないどこけそうになつたりしたのですが、ロリコンさんが支えてくれたりしてくれたです。流石、ロリコンさんなのです。

それからも庵を飛び越えたり登つたりしたり、険しい道を進んで庵に着いたのです。

「ふむ、貴女も武術を嗜んでいるみたいですから、権能無しの純粋に武術のみで戦いましょうか」

庵に着いて直ぐに勝負を挑まれたのですが、確かに武術のみなら、そこまで被害は出ないです。

「“でも、リーゼは刀ですよ？”」

「“じつせ中たりませんから問題ありません」

「“むへへやつてやるです”」

「じゃあ、僕は『飯を用意してますね』

「分かりました。では、行きましょう」

「“はいです”」

庵に入らざりに外で対峙するローザと羅翠蓮さん…………お互いに構えを取ると睨み合つです。

「田嶋は取つたらどうですか？　まだ慣れていないでしょ」

「“はいです”」

田嶋を取つて、片田で見ると、やつぱり綺麗な女性なのです。

「それでは、行きましょう」

「“はいです”」

スケッチブックを異空間に仕舞つて、居合の構えを取り直すのです。

「ふつ

羅翠蓮が一瞬で田の前から消えた瞬間、首筋の後ろがチリチリしたので、背後に振り向きながら抜刀したです。

刃は迫つていた羅翠蓮に拳で刀の腹を叩かれる事で迎撃されたのです。

「なるほど、多少はやつますね」

「どうやら、助かつたみたいなのです。

「……」

「このままじゃ負けるのです。

「来なさい

手でこじこじまでもされるとは、屈辱なのです。なので、こちらも本気なのです！」

「ほう…………」

刀を戻して、縮地で何度も切り替えし残像を残しながら接近するのです。

「どれが本物か解らないなら、全て破壊すればいいのです！」

羅翠蓮は素手で地面を殴り、地面を粉碎して土や岩などを弾丸として無作為にぶつけて来たのです。

流石、カンピオーネ…………無茶苦茶なのです。土や岩を足場にして更に不規則で接近するのです。

「ふむ…………」

近付いた瞬間、抜刀して高速で切り付けないと、羅翠蓮は同じく拳で応酬して来るのです。

「さて、終わりですね」

「がつ」

切り合っていたら、刀の隙間を付いて、蹴りがリーゼの鳩尾に入つてリーゼは真っ暗になつたのです。

次に気付いた時は、羅翠蓮さんに膝枕されていました。

「田覚えましたか」

「“はいです”」

「貴女は確かに才能もありますが、あの剣術は無理矢理覚えただけの付け焼き刃ですね」

確かに、神様の剣術を無理矢理身体に覚えさせただけなのです。

「それに、完成された剣術の技術に体術の技術が体追い付いていません。はつきり言って、宝の持ち腐れですね」

「“あう”」

「なので、孫悟空復活の準備が整うままで鍛えてあげましょ。感謝なさい」

「“はいです”」

なんか、逆らつたら大変な目にあいそなので、取り敢えず修行を

付けて貰つ事にしました。

それから二年、十一歳になつたリーゼはまだ廬山に居るです。

「師父はハズレを引いて怒つてゐる様で、手が付けられません。どうにかお願ひします」

なるほど、だからこんなに激しいのです

今は、義姉様と色々壊しながら組み手中なのです。

「全く、たつた一年で此処まで来るとは驚きです」

飛び蹴りをしたら、避けられてそのまま後ろの岩を粉碎して、その場で旋回、襲つて来た姉様の脚を旋回しながら迎撃したです。

「これなりびくですか?」

それから、高速で蹴つたり殴つたりの近接戦闘なのです。当然、周りの被害は凄いのです。

「“今日この勝つです!”」

「やれるものならやつてみなさい!」

「さて、今日も後が大変そうだな…………」

それから、三時間程殴り合ひを行つたのです。

「“勝利なのです”」

「まさかたつた一年で、勝利をもぎ取られるとは思ひませんでした」

「“一十回もやれば一回は勝てるのです”」

「これでも、片腕と片足を犠牲にしての勝利なのです。

「山を壊すとは思いませんでしたが、確かに有効な手段です」

「お一人共、お食事の用意が出来ています」

「分かりました」

「ご飯を食べ終わると、お姉様が何か持つて來たです。義姉妹にされた時と同じ感じですか？」

「これで、貴女も免許皆伝です。もう日本に行つても大丈夫でしょう」

「“やつとののです”」

「それじゃ、僕が送つて来ますね」

「ええ。日本に孫悟空の情報があればよろしくお願ひします」

「了解です」

それから、姉様と別れてロリコンさんに、偽造パスポートを渡されて飛行機のファーストクラスに乗せて貰つたです。

日本に着いたら、草薙さんの所に行って、リーゼの旅は終了なのです。でも、日本にもカンピオーネがいるらしいので、会いに行くです。

「飲み物はいりませんか？」

「アップルジュースで」

「どうぞ」

美味しいジュースを飲んでいると、変なオジサンがやつて来ました。

「失礼ですが、日本にはどういった御用件で？」

「手紙を届けるのと、コレクションを手に入れる為、観光なのです」

「そうですか……」

いつたい何だつたんです？まあ、リーゼは日本に着いたら草薙さんを探しに行くのです。

はやく明田に向ふなるで、す、あれ、姉様からの手紙だ

日本のカンピオーネの実力を試して来なさい  
なのです。  
了解

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3100s/>

---

カンピオーネ～幼女魔王の冒険～

2012年1月10日20時26分発行